

26PB-am228

薬学教育における学習意欲とコミュニケーション能力の醸成のための PBL 型実習の実施とその評価

○川井 龍美¹, 飯塚 晃¹, 新木 敏正¹, 奈佐 吉久¹, 船山 信次¹, 中村 和男¹, 伏谷 眞二¹, 北村 繁幸¹, 小林 賢¹, 齋藤 俊昭¹, 喜多代 晋¹, 新井 一郎¹, 西川 由浩¹, 稲瀬 實¹ (日本薬大)

【目的】日本薬科大学では、自己表現能力・問題解決能力の醸成のための教育の一環として、2 年次に薬学総合実習(PBL 実習)を実施している。この実習は、文献検索・発表形式、ワークショップ形式の 2 部から構成されている。今回、これら各実習形式の内容とその有効性について評価を行った。

【方法】1 グループを 10~13 名とし、以下に示す内容で各実習を行った。

1) 文献検索・発表形式: 医学、薬学、生命科学などのテーマについて、資料収集後、発表資料を作成させ、SGD を行い、ブラッシュアップ後、グループ内で発表練習させた。最後に全体での発表・質疑応答を実施した。

2) ワークショップ形式: 与えられたテーマに対して、KJ 法による問題点の抽出、二次元展開法による整理、そして問題解決法の立案を SGD にて行った。

本実習の有効性の評価は、実習終了直後のアンケート調査により行った。

【結果】各実習形式で行ったアンケート調査結果は以下の通りである。

1) 文献検索・発表形式: 自分の課題や他人の発表に関する関心は 97%以上と高かった。一方、自分の発表に対する満足度については 44%と低かったが自己採点の結果は平均 72 点であった。「積極的に話し合いに参加したか」、「他者の発表内容を理解したか」など 4 項目に関して自己評価をした結果、4 段階評価において 3.3~3.5 ポイントであった。

2) ワークショップ形式: 「話し合いをまとめるためにリードできたか」の評価のみ 4 段階評価において 2.5 ポイントと低かったが、「他者の発言を理解し自分の意見を述べられたか」、「課題内容を十分達成できたか」など 5 項目の自己評価は 3.1~3.5 ポイントであった。

【考察】以上 2 形式による実習中、文献検索形式とワークショップ形式に関しては、ほぼ全員が満足した評価を示していた。毎年本形式による、実習を実施しているが、本年の結果とほぼ同様の結果が得られており、学習意欲とコミュニケーション能力の醸成に有効な方法であることが示唆された。